

離も良好であった。運動負荷量と洗い出し率の間には正の相関 ($r=0.61$) があった。本法は冠動脈疾患の定量的評価法として、優れた方法であると結論された。

9. 位相ヒストグラムによる WPW 症候群の定量的解析

谷口 充 中嶋 憲一 分校 久志
 滝 淳一 南部 一郎 四位例 靖
 利波 紀久 久田 欣一 (金沢大・核)
 向 恵一 三崎 拓郎 (同・一外)

位相解析において従来の視覚的イメージに加えて、位相ヒストグラムによる定量的解析を行い、WPW 症候群の診断率の改善を計り、心電図とも対比検討した。方法は位相イメージにて、右および左心室に関心領域 (ROI) を設定し各 ROI の最大値、最小値、平均、標準偏差、左右の平均の差および最小値の差、両心室の位相範囲を求めた。正常人と WPW 症候群の鑑別には、最小値、標準偏差、平均の差、最小値の差、範囲が有用であった。また範囲と QRS 幅との相関は、 $r=0.688$ ($p<0.001$) と良好であった。

10. ^{123}I -IMP による FVO (Frontoverticoccipital) Scan

阿隅 政彦 竹原 康雄 金子 昌生
 畠山 真行 加藤 俊彦 杓掛 康道
 (浜松医大・放)
 北沢 幸保 杉江 義男 (同・放部)

^{123}I -IMP による頭部 SPECT では、患者の体軸のまわりにガンマカメラを 360° 回転させる方法が一般的だが、前頭部、頭頂部、後頭部方向に 180° 回転させる FVO Scan を考案した。この FVO Scan により、患者の肩に邪魔されず、カメラを患者に近づけることが可能となり、かつ大脳半球を対称的に Scan することができる。従来の方法と FVO Scan を基礎的、臨床的に比較検討し、FVO Scan では (1) 分解能が向上。 (2) システム感度が上昇。 (3) 吸収補正なくとも、大脳半球を対称的に Scan するため両半球の血流分布を比較するのに適する。 (4) 180° 回転では深部の画像がひずむといわれているが、全般的には FVO Scan は臨床的に有用であるという印象を得た。

11. 脳腫瘍の ^{123}I -IMP (N-イソプロピル-p-ヨードアンフェタミン) 像, Gd-MRI 像, 造影 CT 像の比較検討

田所 匡典 浅井 英彰 牧野 直樹
 石垣 武男 佐久間貞行 (名大・放)

原発性、転移性脳腫瘍患者 11 例に ^{123}I -IMP 静注投与による SPECT, 造影 CT, MRI を、Gd-DTPA 造影 MRI を 8 例に施行し比較検討した。腫瘍部への IMP 集積は 30 分で 3 例、5 時間で 3 例みられた。Gd-MRI では 5 例造影効果を認め、1 例を除き造影 CT と一致した。Gd-MRI と造影 CT はよく相関したが、IMP 集積と Gd-MRI, 造影 CT での造影効果に明らかな相関はなく腫瘍への IMP 集積はヨード系造影剤や Gd-DTPA の場合のような血管構築に起因するわけではなく、他の異なる機序が関与していることが示唆された。

12. てんかん患者の局所脳血流 (^{123}I -IMP 静注法による検討)

関 宏恭 松田 博史 隅屋 寿
 辻 志郎 大場 洋 寺田 一志
 久田 欣一 (金沢大・核)

従来てんかんの診断は臨床症状と脳波所見を基盤としてなされてきた。今回われわれはてんかん患者の発作間歇期における焦点の血流状態を評価し、焦点の局在診断に関して脳波所見と比較する目的で、20 例のてんかん患者 (男 10 名、女 10 名、平均年齢 29 歳) に ^{123}I -IMP を投与し SPECT による脳血流断層像を得た。いずれも発作間歇期である。20 例中 5 例が正常像を示した。他は脳組織変形の 1 例を除いては、いずれも局所性あるいはびまん性低灌流を示した。20 例中 9 例で片側局所性低灌流を示し、低灌流域が両側半球にわたったものは 4 例であった。病変の局在について IMP と脳波とが共通所見を有した例は 8 例であり、今後さらに検討を要するものと思われる。